

モダリティ

井上 優

A 解説

1. モダリティとは

1.1. モダリティ概観

文（発話）の意味内容は、大きく分けて、1)「叙述の素材」としての客観的な意味内容と、2)「文の述べ方」に関わる主観的な意味内容という2つの部分からなる。前者は「命題内容」（言表事態）、後者は「モダリティ」（ムード、言表態度）と呼ばれる（「ムード」は、「ヴォイス」「アスペクト」「テンス」と並ぶ述語の形態に関わる概念として限定して用いられることもある）。

(1)の各文は、「行く」を命題内容として、それぞれ〈推量〉〈命令〉〈疑問〉〈丁寧〉というモダリティが加わったものである（以下、「↑」は上昇イントネーションを表す。また、「↑」をつけない場合は上昇イントネーションが加わらないものとする）。

- (1) a 行くだろう。 〈推量〉
 b 行け (**ik-e**)。 〈命令〉
 c 行くか↑? 〈疑問〉
 c 行きます。 〈丁寧〉

日本語のモダリティ表現には、1) 述語の活用形、各種の述語付加形式（例2）、2) 文副詞（文副詞相当表現）（例3）、3) 感動詞（間投詞）・間投助詞（例4）、4) イントネーション（例5）、がある。以下に主なものをいくつかあげる。

- (2) a 行け (**ik-e**)、行きなさい、行って (くれ)、行ってください、行こう、行きましょう
 [(述語・接辞・複合動詞の)活用形]
 b 行きそうだ、行きます、行きたい、行ってほしい、行かなければならない、行ってはいけない、行ってもよい、行けばいい、
 [接辞（相当表現）、複合動詞]
 c 行くだろう、行くらしい、行くようだ、行くかもしれない、行くにちがいない、行くはずだ、行くべきだ、行くのだ、行くわけだ、行くそうだ
 [助動詞（相当表現）]
 d 行くな、行くよ、行くね、行くか、行くよね、行くじゃないか
 [終助詞（相当表現）]
 e たぶん行くと思う、（相手に命令する場面で）行くことを命ずる（行くよう命ずる）
 [遂行動詞表現]

- (3) a たぶん (おそらく) 行く, もしかしたら (ひょっとすると) 行くかもしれない, どうも (どうやら) 行くようだ, はたして (いったい) 行くんだろうか
 b 幸い (幸いにも) うまくいった, 困ったことにうまくいかない
 c 実は (実を言うと) 行くんです, 正直なところうまくいかない

[文副詞 (相当表現)]

- (4) a えーと, あのう, え?, あれ?, はあ, うーん, はい, いいえ [感動詞]
 b 私はね, 今回の結果をね, たいへんうれしく…。 [間投助詞]
 (5) 行く。(断定) 行く↑?(疑問) [イントネーション]

これ以外にも, ある形式の特定の用法が「ムード的な用法」(モーダルな用法)の名で呼ばれることもある。いわゆる「ムードのタ」(発見, 思い出しなど)がその代表である。

- (6) a あ, あった。[「発見」のタ]
 b 確か井上さんでしたっけ。[「思い出し」のタ]

モダリティの分類については, いくつかの異なった見方がある。また, 用語等も研究者によって異なるが, 大まかには次のような分類が可能である (モダリティの概説としては森山・安達1996がある)。

- 1) 命題内容に対する話し手の判断のあり方を表すもの
 (判断のモダリティ, 対事的モダリティ, 命題めあてのモダリティ)
 - a 真偽判断のモダリティ (認識的モダリティ)
 - ・確言 (～φ)
 - ・推量 (だろう, まい)
 - ・蓋然性判断 (かもしれない, にちがいない)
 - ・証拠性判断 (らしい, ようだ, (～し) そうだ)
 - ・当然性判断 (はずだ)
 - ・伝聞 ((～する) そうだ)
 - ・説明 (のだ, わけだ)
 - b 価値判断のモダリティ (当為評価のモダリティ)
 - ・適当 (べきだ, ほうがよい, (～すれ) ばよい, 等)
 - ・必要 ((～し) なければならない, (～せ) ざるをえない, 等)
 - ・容認・非容認 ((～し) てもいい, (～し) てはいけない, 等)
- 2) 聞き手に対する発話態度・伝達態度を表すもの
 (発話・伝達のモダリティ, 対人的モダリティ, 聞き手めあてのモダリティ)
 - a 述べ立て
 - b 表出 (意志, 願望)
 - c 働きかけ (命令, 依頼, 禁止, 勧誘)
 - d 疑問・問いかけ・確認
 - e 強調 など

以下, 2点補足を加える。

1) 終助詞、感動詞については、「はい、大丈夫ですよ」「あのう」のような、聞き手に対する働きかけを表すものは典型的な発話・伝達のモダリティの表現だが、「あれ？ 変だぞ↑」「えーと、困ったなあ」のように独り言でも使えるものも、「話し手の心の動きを直接表す」表現として、発話・伝達のモダリティに準ずるものとして扱うのが穏当である。

2) 「(～し) てはいけない」「～のだ」のように、基本的には判断のモダリティの表現であるが、文脈によって発話・伝達のモダリティの表現としての性格を帯びるケースもある。

- (7) a ここでタバコを吸ってはいけない。 〈禁止〉
 b ほら、早く行くんだ！ 〈命令〉

1.2. モダリティ研究のタイプ

モダリティに関する研究には、大きく分けて三つのタイプがある。

第一のタイプは、

- ・モダリティの体系の全体像を描き出す。

という研究である。そのような研究の代表としては、仁田(1991)、益岡(1991)、森山(2000)があげられる。

第二のタイプは、

- ・当該のモダリティ形式の基本的な意味を抽出するとともに、そこから具体的な用法が派生されていくさまを記述する。

という研究である。これは、一つの形式が複数のモダリティを表しうることに注目したものである。

例えば、「～(よ)う」は〈意志〉〈申し出〉〈勧誘〉の三つのモダリティを表しうる。

- (8) a [ひとりごとで] 明日も朝早いし、もう寝よう(つと)。 〈意志〉
 b [聞き手に対して] 私が荷物をお持ちしましょう。 〈申し出〉
 c [聞き手に対して] 今度ビールでも飲みに行きましょう(よ)。 〈勧誘〉

「だろう」も〈推量〉と〈確認要求〉の二つを表しうる。

- (9) a 今度こそ成功するだろう。 〈概言的推量〉
 b 君はまだ学生だろう↑？ 〈確認要求〉

「ね」も「確認要求」を表す場合と「同意要求」を表す場合とがある。

- (10) a 今度こそは大丈夫ですね↑？ 〈確認要求〉
 b 今日はいい天気ですねえ。 〈同意要求〉

これらは、当該形式がある基本的な意味——「述語+φ」は〈確言(断言)〉、「～だろう」は〈判断形成〉、「～(よ)う」は〈意向形成〉——を有し、それが場面やイントネーションによって、より具体的な用法として具現化されるということである。このタイプの研究では、「どのような基本的な意味が、どのような条件のもとで具体的な意味用法として具現化されるか」が問題にされる。

このタイプの研究の手本というべき研究に、「のだ」に関する田野村(1990)がある。

第三のタイプは、

- ・複数形式の特定の用法を〈確認要求〉〈意志〉といったカテゴリーにまとめ、その中の各形式の使い分けを記述する。

というタイプである。これは、複数の形式のある用法が一つの意味カテゴリーとしてまとめられるということに注目したものである。

例えば、「君はまだ学生だろう↑？」(=9b)の「だろう↑」と「今度こそは大丈夫ですね↑？」(=10a)の「ね↑」は、ともに〈確認要求〉の表現と呼ぶことができるものである。また、「～(よ)う」は〈意志〉の用法を持つが、他にも〈意志〉の表現として「～つもりだ」「～ことにする」などをあげることができる。

- (11) a 私はしばらく休むつもりだ。
b 私はしばらく休むことにする。

このタイプの研究では、このような「確認要求表現」「意志表現」といった枠において、そこに含まれる形式がどのように役割分担をしているか——「確認要求表現」や意志表現がどのような体系をなしているか——が問題にされる。

宮島・仁田編(1995)には、このようなタイプの研究が集められている。

2. 日本方言のモダリティ 富山県井波町方言の場合

「モダリティ」という枠の中で考えることができる表現は多岐にわたり、「全国方言のモダリティに関する現象全般」を総論的に概観することは、筆者の現在の能力を超える作業である。そこで、以下では、富山県井波町方言のモダリティのうち、標準語との比較で問題になりそうな部分について少しばかり記述をおこなう。

(全国の方言を視野に入れた組織的な調査のための「B. 項目」を提示することも、現段階では困難である。それを補うべく、第2節、第4節では、できるだけ具体例をあげながら記述をおこなうことにする。)

方言のモダリティについては、「標準語に同じ(または類似の)機能を持つものが見出せる」場合と、「標準語に類似の機能を持つものが見出せない」場合とがある。井波町方言のモダリティ表現の多くは前者に属する。とりわけ、判断のモダリティについては、井波町方言に特徴的に見られる現象といえるようなものは見出しにくい。他の方言では、証拠性(evidentiality)と関連づけて説明される東北諸方言の「ケ」(渋谷1999b, 長澤1999, 竹田2001), 種子島方言の「ケル」(小林1999)など)のように、標準語に類似の機能を持つものが見あたらないものもあるが、井波町方言ではそのような表現はない。

その中で、標準語の「のだ」の直訳である「ガヤ」(「ガ」は形式名詞, 「ヤ」は判定詞)が「のだ」の用法の一部しかカバーせず, (11)(12甲)のような「実情告白」や, (13)「何言ってるんだ」のような詰問の場合は「ガイ」(「イ」は終助詞)になるというのは, 興味深い現象である(井上1998b参照)。

- (12) 甲: ちょっと寄ってかない?
 チョココ 寄ッテカンケ?
乙: (「申し訳ないんだけど, 実は」という口調で)
 それが(実は)今日は寄ってられないんだ。[実情告白]
 ソング, (実は)今日 ナン 寄ッtrenガイ (??寄ッtrenガヤ)。
(13) 甲: 私, 井上さんって, まだ会ったことないんだ。[実情告白]

オラ、井上サンチャ マダ オータコト ナイガイ (??ナイガイ)。

乙：あ、そうなんだ。会ったことないんだ。[実情把握]

ア、ソナガイ。オータコト ナイガイ。

(14) (「なんであれをすてた?」と聞かれ)

何言ってるんだ。[詰問] あなたがすてろと言ったんだ。[実情再確認]

何 ユートルガイ (??ユートルガイ)。アンタガ 捨テ ユータガイ。

(15) あの人、一体全体、何を言っているんだ? [通常の問いかけ]

アノ人、一体全体、何ユートルガイ?

発話・伝達のモダリティについても、「言い切り形+ナイカ」(言い切り形+じゃないか)、「意向形+マイカ」(意向形+じゃないか)のように、形態的には標準語と違ってても、意味的には標準語に対応する表現が見出せることが多い。(ただし、細部では、「じゃないか」は「やればできるじゃない」のように「か」が省略できるが、「ナイカ」は「ヤレバデキルナイ」のような「カ」の省略はできないということはあつたりする。)

(16) a ヤリヤ、デキルナイカ。(やれば、できるじゃないか。)

b ハヨ 行コマイカ。(早く行こうじゃないか。)

個別的には、いくつか興味深い現象がある。

1) 井波町方言では、命令形以外に意向形が「言い聞かせ」「指導」のニュアンスの命令表現として用いられる(意向形の命令用法)。

(17) a ハヨ 行ケ。 [命令形]

b ハヨ 行コ。 [意向形の命令用法]

標準語の「早く行こう」は、相手を説得する場面では用いられるが、命令としては用いられない。しかし、井波町方言の意向形の命令用法も、「言い聞かせ」的なニュアンスを有する点では、意向形の意味の延長線上にあるものと考えることができる。

2) 井波町方言では、真偽疑問文では「カ」「ケ」(「ケ」は標準語の「かい」に相当し、意向形や推量形にはつかない)の二つの終助詞が使用可能だが、疑問詞疑問文は、述語が意向形や推量形の場合を除き、基本的に「ケ」だけが使用可能である。

(18) アンタモ 行クガカ? (行クガケ?) (あなたも行くのか?)

(19) a アンタ 何 シトルガケ (??シトルガカ)? (あなた、何してるの?)

b 時間マデ 何 シトロカ (*シトロケ)? (時間まで何してようか。)

c アノ人、今ゴロ 何 シトロカ (*シトロケ)?

(あの人、今ごろ何をしているだろうか。)

真偽疑問文と疑問詞疑問文とで用いられる終助詞が異なるということは、いくつかの方言について報告されていることである(沢木1984など)。ただし、標準語でも、「(あなたは)何をしているのか」のような、述語の非丁寧形に「か」がついた形は、「(あなたは) 何をしているのか、私にはわからない」のような間接疑問文としては自然だが、独立の質問文としてはいささか不自然である(独立の質問文として自然なのは、「何してる?」のような「か」のない形、あるいは「何をしていますか?」のような「丁寧形+か」の形である)。(19a)の現象もこれに類する現象である可能性がある。

ただし、「相手の身になって『どうしようか?』と考えながら、相手の意向を問いかける」というニュアンスで疑問詞疑問文を発する場合は、疑問詞疑問文でも「カ」が使える。意

向形を含む疑問詞疑問文の場合に「カ」が用いられることと関係しているのかもしれないが、興味深い現象である。

(20) アンタ、何 食ベッカ? (あなたは何を食べようか)

3) 特徴的な感動詞に「ナン」(ナーン)がある。標準語の「いいえ」「いや」「全然(～ない)」に相当する意味を表し、文頭、文中を問わず、頻繁に使用される。

(21) 甲：アンタ、行カッシャル? (あなた、行かれる?)

乙：ナン、行カン。(いや、行かない。)

(22) ナン ウマイコトイカン。(全然うまくいかない。)

(23) ソンガ ナン アンタ、マダ 帰ッテコンガヤゼ。

(それが、いや、あなた、まだ帰ってこないんですよ。)

方言における発話・伝達のモダリティで特徴的なのは、何と言っても終助詞(文末詞)である。以下、井波町方言でよく用いられる終助詞相当表現について概観する(以下の記述は井上1998aにもとづく)。

1) 命令形につく終助詞

動詞の命令形につく終助詞には「ヤ」「マ」「カ」がある。

「命令形+ヤ」は、標準語の「命令形+よ↑」と同様、「念押し」を含んだ命令を表す。また、「命令形+マ」は、標準語の「命令形+よ(非上昇)」と同様、「話し手の意向に反する状況がある」として相手にその修正を求める「状況修正要求」の命令である。

(24) (相手に念をおすように)

昨日 遅カッタサカイ、今日ハ ハヨ ネーヤ↑ (ネーヤ)。

(昨日は遅かったから、今日は早く寝ろよ↑。)

(25) (自分を置いてさっさと行こうとする相手に)

オイ、チョッコ 待ッマ (待ッマ↑)。

(おい、ちょっと待ってろよ。)

「ヤ」「マ」は上昇・非上昇いずれも可能である。上昇か非上昇かで多少ニュアンスは異なるが、「命令形+ヤ」が「念押し」を含んだ命令、「命令形+マ」が「状況修正要求」の命令文であることには変わりはない。

標準語の「命令形+よ(非上昇)」は、聞き手に対する軽い懇願や説得の気持ちを含んだ命令として使われることがある。「このように指示することは聞き手の意向にそわないことかもしれないが」という気持ちで命令していることを「よ(非上昇)」で表すわけだが、これも井波町方言では「マ」で表される。

(26) 空イタ席 アルカドウカ、チョッコ 見テキテマ。

(空いた席があるかどうかちょっと見てきてよ。)

(27) ソンナ ケチナコト 言ワント、チョッコ 見シテマ。

(そんなケチなこと言わないで、ちょっと見せてよ。)

「命令形+カ」が表すのは「許容・放任的な命令」である。「～しなければならない」と相手に行為を強制するのではなく、「～すればよい」と相手の行為を許容・放任することによって相手に行為をさせるわけである。

(28) チョッコ 休メカ。(ちょっと休め。)

実際、相手に行為を強制する文脈では「命令形+カ」は使えない。

(29) (なかなか寝ようとしない子供に)

a コラ, ハヨ ネー。(こら, 早く寝ろ!)

b *コラ, ハヨ ネーカ。

「命令形+カ」が許容・放任的な命令を表すというのは、ちょうど標準語で、「行きたければ行け」「好きなようにしろ」のような命令文が許容・放任的な命令を表すのと同じことである。砺波方言には「許容・放任的な命令」を表す専用形式があるわけである。

2) 「チャ」

続いて、平叙文で用いられる終助詞について見ていく。

まず、「チャ」は「これは既定の事項である」という気持ちを表す(標準語では「よ」が最も近い。)そこから、「これはあらためて考える(言われる)までもないことだ」、「これ以外の選択肢は考えられない(考える必要はない)」といったニュアンスが生ずる。

(30) ソリヤ ソーヤチャ。(そりゃそうだよ(考えるまでもない))

(31) (「この豆腐古いけど大丈夫?」と聞かれ、豆腐の状態を見もせずに「大丈夫」と決めつけて)

ナン ドモナイチャ。(大丈夫だよ(余計な心配をするな))

(32) (聞き手を励ますように)

アンタナラ ドモナイチャ。

(あなたなら大丈夫だよ(心配する気持ちはわかるがそんな必要はない))

(33) 頼ンチャ。(嘆願)(頼むよ(頼むというしかない))

既定の実情を告白する際に「チャ」が用いられることも多い。

(34) オラ アンマ 寝トランガイチャ。(（実は）私、あんまり寝てないんだよ)

その場で決めたことを述べる文で「チャ」を用いた場合も、「これ以外の選択肢を考える余地はない(考える必要はない)」という気持ちが表される。

(35) (「行くしかない」と観念して)

ワカッタチャ。行クチャ。行キヤ イーガヤロ。

(わかったよ。行くよ。行けばいいんだろう)

(36) (「これで大丈夫なはずだ」という気持ちで)

ナラ, オラ 先 行ッテ マットツチャ。

(じゃ、ぼくは先に行って待ってるよ(これ以外の選択肢は考えなくてよい))

「チャ」を長くのばして発音した「チャー↑」は、すでに定まっている自分の意向をあらためて聞き手に念押ししたり(例37, 38), 「いやあ、(何度考えてみても)本当に…だねえ」という感嘆の気持ちを表したりする(例39)。後者の場合、「何度考えてみても、この思いはかわらない」というあたりが「話し手にとっての既定事項」ということと結びつくのかもしれない。

(37) オラ, サキ 行ットルチャー↑。(私, 先に行っているよ↑。)

(38) 頼ンチャー↑。(頼むよ↑。)

(39) (お互いに「いやあ、本当に久しぶりだ」という気持ちで)

甲：アンタ，ホンマ 久シブリヤチャー↑。(あなた，本当に久しぶりだねえ。)

乙：ホンマヤチャー↑。(本当だよねえ。)

3) 「ワ」「ジャ」

「ワ」「ジャ」は「これは個人的な認識である」という気持ちを表す。(標準語では「よ」が最も近い。)
「ワ」は単に「自分が見る(知る)かぎりではこうだ」というだけだが(井上1995c)，「ジャ」は「見たら(考えたら)正しくはこうだ(そういわざるをえない)」と話し手個人の認識の更新が誘発されたことを表す。

「自分が見る(知る，考える)かぎりではこうだ」という形で述べにくい事実には，「ワ」「ジャ」は使いにくい。

(40) (自分の出身地を聞かれて)

a 井波ヤ。(井波だ)

b ??井波ヤワ。 / ??井波ヤジャ。(井波だよ)

「ワ」「ジャ」が自然なのは，その場の個人的判断を述べる，あるいは個人的な記憶の範囲内で述べる場合である。

(41) («これ誰の?」と聞かれて)

a タブン オラノガヤワ。

((私が見るかぎりでは) たぶん私のだよ)

b ア，ヨー 見タラ オラノガヤジャ。

(あ，よく見たら(意外にも)私のだよ)

(42) («この豆腐古いけど大丈夫?」と聞かれ，豆腐の状態を見たところ「大丈夫」という感触を得た)

a ナン ドモナイワ。

((私が見るかぎりでは) 大丈夫だよ)

b ナン ドモナイジャ。

((いたんでいるかとも思ったが，見てみたら思いのほか) 大丈夫だよ)

(43) (会議の開始時刻を聞かれて)

a 確か 三時ヤワ。

((私の記憶では) 確か三時だよ)

b 確か 三時ヤジャ。

((特に明確に意識していなかったが，あらためて思い出してみると) 確か三時だよ)

(44) (聞き手の背中に何かついているのが見えた)

a アンタ 背中ニ ナンカ ツイトルワ。

(あなた，背中に何かついているよ(自分にはそう見える))

b アンタ 背中ニ ナンカ ツイトルジャ。

((今まで気づかなかったが，よく見たら) あなた，背中に何かついているよ)

「ガヤ」(のだ)に「ワ」「ジャ」がついた場合も，実情に関する個人的解釈を述べる文になり，実情を告白する文にはならない。

(45) (人がねむそうにしているのを見て)

a アノ人, アンマ 寝トランガヤワ。

((自分が見るかぎりではきっと) あの人あまり寝てないんだよ))

b アンマ 寝トランガヤジャ。

((最初は特に明確に意識しなかったが, あらためて見たところ, どうも) あの人, あまり寝てないんだよ)

4) 「ゼ」

「ゼ」は、既成の知識とくいちがう現状に接して「あれ？ どういうこと？」ととまどいを感じていることを表す。「おかしいなあ」と困惑している場合もあれば、「おや、自分が思っていた（知っている）のと違う」と意外に感じているだけの場合もある。

(46) (さっきまでこの場にいた井上がいない)

甲：アレ？ 井上サン オツテナイゼ↑。

(あれ？ 井上さんがいらっしゃらないぞ↑)

乙：エ？ サッキマデ オツテヤッタガイゼ↑。

(え？ さっきまでいらしたんだよ↑)

(47) (聞き手が珍しく背広を着てきたのを見て)

アレ？ アンタ メズラシーゼ↑。(あれ？ あなた珍しいじゃない)

次の例でも、願望と実情とが一致せず困っているという気持ちが「ゼ↑」で表されている。

(48) (「困っているんですよ」という気持ちで)

最近 アツテ ナン 寝レンガイゼ↑。(最近暑くて全然寝られないんですよ↑)

(47)のように聞き手自身にかかわることがらについて述べる場合は「じゃないか」、それ以外の場合は「ぞ↑」などで「ゼ」に近い意味を表すことはできる。しかし、次のように話し手がとまどいや困惑を感じていない文脈では「ゼ」は使えない。

(49) (料理ができあがった)

ヨシ, デキタゾ↑ (??デキタゼ↑)。 (よし, できたぞ↑)

(50) (灰皿が見つからないと騒ぐ夫に)

ホラ, ソコニ アルナイケ (??アルゼ↑)。 (ほら, そこにあるじゃない)

「デキタゼ↑」「アルゼ↑」が自然なのは、「あれ？ できないと思ったらできた（どうして?）」、「おや？ ないと思ったらある（どういうこと?）」という場合である。

3. 研究の現状

(他の項目では「研究の現状」は4.であるが、モダリティ研究の現状を考慮して、ここでは3.として述べることにする。)

モダリティは、日本語文法研究において古くから研究がおこなわれている分野である。特に終助詞については、藤原(1982, 1985, 1986)のような大著もある。ただ、研究の関心は主に「当該方言にどのような終助詞があるか」を把握する、あるいは終助詞の社会言語学的特徴をとらえることに置かれることが多く、「表現の形式と意味の相関を精密かつ組織的に記述する」(益岡1991:序章)という意味での記述研究にはそれほど強い関心が向けら

れていたとはいえない。また、意味記述もどちらかといえば個別的・主観的な方向に傾くきらいがあり、方言研究の側から一般言語学的に意味のある概念や枠組みが明示的に提出されるといふこともあまりなかった。

しかし、近年、終助詞の意味分析をはじめとする、方言モダリティの体系的な研究がすすみつつある。特に、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室が発行している『阪大社会言語学研究ノート』には、そのようなタイプの研究が精力的に発表されている。

また、先に述べた、古典語の「けり」に由来すると見られる諸形式（東北諸方言の「ケ」、種子島方言の「ケル」など）については、一般言語学でいう証拠性（*evidentiality*）と関連させた研究が蓄積されつつある。また、確認要求表現（「ね」「だろう」「じゃないか」など）のように、標準語の記述文法研究において分析が進んでいる分野についても、その成果を方言の記述文法研究に応用する作業がすすめられている（渋谷2001など）。

そのような流れはあるものの、概して、方言のモダリティ研究においては、「標準語などを含む、より一般的な枠組みの中でとらえるべき部分」と「その方言個別の問題としてとらえるべき部分」の見極めがまだ十分になされているとはいえない。また、方言のモダリティ表現の文法的・意味的性質を記述するための道具立てもまだ貧弱であるといわざるをえない。

現段階ではまず、「標準語などを含む、より一般的な枠組みの中でとらえるべき部分」と「その方言個別の問題としてとらえるべき部分」を見極めるとともに、モダリティ表現の意味記述のための道具立てをより豊かなものにすべく、各地方言の終助詞の精細な分析を積み重ねることが必要である。

4. 調査（内省調査）の着眼点

上のような現状認識にもとづき、終助詞（文末詞）を例にしながら、日本語方言のモダリティについて調査・分析をおこなう際の基本方略、ならびに調査・分析の着眼点について述べる（以下の記述は井上2001にもとづく）。（以下の記述の基本的な部分は終助詞以外についてもあてはまる。また、以下の記述は分析者自身の内省調査を念頭においているが、基本的な部分はインフォーマント調査の場合にもあてはまる。）

4.1. 調査・分析の基本方略

まず、終助詞を例として、方言のモダリティの調査・分析をおこなう際の基本方略について述べる

方言終助詞の記述研究をおこなう際にまず重要なのは、

分析しやすいもの(母語話者として内省しやすいもの)から順次分析をおこなう。

ということである。文法記述において最も重要なのは「体系性をとらえる」ことであり、それゆえ、文法研究においては研究の様々な局面で「全体への目配り」が重視される。しかし、実際に「全体への目配り」ができるようになるのは、記述の量的・質的な蓄積がある程度進んでからのことである（ヴォイスやテンス・アスペクトについては体系的な研究が進んでいるが、それは、研究の量的・質的な蓄積を通じて、現象の基本的な部分がかなりの程度明らかになっているからである）。今の段階ではとりあえず、使用頻度が高く、母語話者にとって内省しやすいものから順次分析をおこなうのが得策である。

方言終助詞の記述研究において次に重要なことは、

既存の分析（特に標準語の分析）が応用できるところは、できるだけ既存の分析を応用する。

ということである。「終助詞の意味記述のための道具立てをより豊かなものにする」ためには、むやみに新しい道具立てをつくりだすのではなく、既存の分析の有効性をいろいろな形でチェックし、既存の分析が応用できない部分を見極めた上で、新しい道具立てをつくることが肝要である。

②にはもう一つ重要な意味がある。それは、既存の分析—特に標準語の分析—を応用することで、当該方言の非母語話者にも終助詞の意味がある程度具体的に理解できるということである。終助詞の意味分析とは、つまるところ終助詞に関する母語話者の直観を説明することである。母語話者と非母語話者とで近似値的であれ語感が共有できれば、終助詞の意味に関する議論もより開かれたものになる。このことは、終助詞の意味を記述する一般的な枠組みを整備する上でたいへん重要なことである。

これに関連して次のことも重要である。

現時点では、終助詞の基本的な意味は大まかな形で記述し、その分、終助詞の意味を考える手がかりとなる情報をできるだけ多く記述する。

先に述べたように、現時点における終助詞の意味記述のための道具立ては終助詞の意味を過不足なく記述できるものにはなっていない。今後、方言間の比較対照などの作業を通じて、終助詞の意味記述の道具立てをより洗練されたものにする必要がある。その際に重要なのはやはりデータである。終助詞の文法的性質、使用可能な文脈、使用によって生ずるニュアンスなど、第三者が終助詞の意味について考える手がかりをできるだけ多く記述しておくことが重要である。

4.2. 記述のポイント（その1）終助詞の文法的性質

次に、方言終助詞の記述研究における記述のポイントについて述べる（以下、標準語形はひらがな、方言形はカタカナで表記する。便宜上、問題となる部分のみ方言形を示すことがある）。

1) 終助詞の文法的性質(1)—使用可能な文タイプ—

終助詞には、平叙文、命令文、疑問文など様々なタイプの文で使える汎用性の高いものと、文タイプが特化された汎用性の低いものがある。標準語でいえば、「よ」は前者、「ぞ」「わ」は後者の例である。

- (51) a 誰かいる {よ/ぞ/わ}。[平叙文]
 b 少し休もう {よ/*ぞ/*わ}。[勧誘文]
 c ちゃんと休め {よ/*ぞ/*わ}。[命令文]
 d どうするんだ {よ/*ぞ/*わ}。[疑問文]

方言においても、「命題内容や発話行為等を聞き手におしつける」ことを表す山形市方言の「ズ」(渋谷2000)、「話し手の思いと反することがらである」ことを表す「ハ」(渋谷1999a)などは汎用性の高い終助詞である。

- (52) a 明日雨だズ、さっきも言っただろう。[平叙文]

- b だから、さっきから言ってるだろう、相談に行クベズ。[勧誘文]
 c とにかく行けズ。絶対そのほうがいい。[命令文]
 d 明日雨降るかズ。／いつ言ったズ。[疑問文]
 (53) a ありゃ、いつの間にか桜散ッタハ。[平叙文]
 b 今日は買い物に行けないから、あるものでケーハー(食べよう)。[勧誘文]
 c そろそろ行ゲハ。[命令文]
 d そっち雪降ッタガハ。[疑問文]

富山県砺波方言(筆者の母方言)の終助詞は、文タイプが特化されていることが多い。例えば、「話し手にとって既定事項である」ことを表す「チャ」、「この場で想起された個人的見解である」ことを表す「ワ」、「既成知識と現実とのギャップにとまどいを感じている」ことを表す「ゼ」は、平叙文専用の終助詞である(井上1995a, 1995b)。(以下、「↑」は文末で上昇すること、「」は文末で上昇しないことを表す。)

- (54) a そんなに心配しなくても、絶対に誰かオルチャ(いるよ)。(そうに決まっている。)
 b まあ、おそらく誰かオルワ(いるよ)。(この場ではそう思う。)
 c あれ、あんなところに誰かオルゼ↑(だれかいるぞ↑)。(どういうこと?)
 (55) a 少し休モ{*チャ/*ワ/*ゼ}。[勧誘文]
 b ちゃんと休メ{*チャ/*ワ/*ゼ}。[命令文]

また、念押し的な命令を表す「ヤ」、話し手の意向に反する状況の修正要求を表す「マ」は、命令形にのみつく終助詞である(井上1995b)。

- (56) a ちゃんと休メヤ↑。(ちゃんと休めよ↑)
 b ちゃんと休メマ。(ちゃんと休めよ)
 (57) a 誰かオル{*ヤ/*マ}。[平叙文]
 b 少し休モ{*ヤ/*マ}。[勧誘文]

平叙文につく終助詞には、テンスの対立のある形式にのみつくものも少なくない。例えば、砺波方言の「チャ」「ワ」「ゼ」は「ヤロー」(だろう)にはつかない(標準語でも「ぞ」「わ」は「だろう」につかない)。

- (58) a 誰かオルラシー{*チャ/*ワ/*ゼ}。
 b 誰かオルカモシレン{*チャ/*ワ/*ゼ}。
 c 誰かオルヤロー{*チャ/*ワ/*ゼ}。

判定詞「だ」(及びその相当形式)につくかどうか重要なポイントの一つである。例えば、標準語の「か」「さ」は「だ」にはつかない

- (59) a これは何か(*これは何だか。)
 b これは本さ(*これは本ださ。)

井波町方言でも、疑問の「カ」「ケ」、強調の「イ」は判定詞「ヤ」にはつかない。

- (60) a コレ 何ノガケ(*コレ 誰ノガヤケ。)(これ、誰の?)
 b コレ、オラノガイ(*コレ オラノガヤイ。)(これは私のだよ。)

2) 終助詞の文法的性質(2)―他の終助詞等との共起関係―

終助詞には、他の終助詞と共起可能なものとそうでないものがある。標準語でいえば、「よ」「ね」「わ」は前者、「ぞ」は後者の例である。

- (61) a 誰かいる {わよ／よね／わね／わよね}。
b 誰かいる {*わぞ／*ぞね／*ぞよ}。

また、終助詞の承接関係も厳密に決まっている。

- (62) a 誰かいる {わよ／よね／わね／わよね}。
b 誰かいる {*よわ／*ねよ／*ねわ／*よねわ}。

砺波方言の場合、「チャ」「ワ」は「ネ」(ね)が後接しうるが、「ゼ」は他の終助詞とは共起しない。

- (63) a やってみないとワカランチャネ (わからないよね)。
b やってみないとワカランワネ (わからないよね)。
c *誰かオルゼネ。

標準語でも砺波方言でも、「ね」「ネ」の後につく終助詞はない。しかし、山形市方言の「ハ」は「ネ」(ね)の後につきうる(渋谷1999a)。

- (64) いつの間にか蔵王に雪が降ったネハ。

「汎用性が高い(低い)」、「他の終助詞と共起可能(不可能)」、「より文末に近い(述語に近い)」ということの文法論的な意味については不明な点が多い。大まかな仮説としては、

- a 汎用性の高い／より文末に近い終助詞は「話し手の発話態度」に関する意味を表す。
b 汎用性の低い／より述語に近い終助詞は「述べられる情報の性質」に関する意味を表す。

ということが考えられるが、この仮説にもとづいて終助詞の意味記述をおこなうことが妥当かどうかはなお検討を要する。終助詞の文法的性質が有する文法論的な意味について考えるためにも、各地方言の終助詞の文法的性質に関する記述を蓄積する必要がある。

4.3. 記述のポイント(その2) 大まかな意味のタイプ

先に述べたように、現時点における終助詞の意味記述のための道具立ては終助詞の意味を過不足なく記述できるものにはなっていない。そのことは例えば次のような形で現れる。

井上(1995b), 船木(1999), 坪内(1995)はそれぞれ独立に、富山県砺波方言の「チャ」、山口方言の「イネ」、博多方言の「タイ」の意味を次のように記述している。

- ・砺波方言の「チャ」は、当該の情報が「既定事項」、すなわち話し手の認識をこえて無条件に真であるとしてよい情報であることを表す。
- ・山口方言の「イネ」は、その命題内容が話し手にとっての既存の確定情報であることを示す。
- ・博多方言の「タイ」は、当該の情報が話し手にとって当然の(分かり切った)情報であることを示す。(坪内1995の記述を筆者なりに述べなおしたもの)

これらはいずれも「話し手にとっての既定事項の提示」という線での一般化である。また、それぞれの方言だけを見るかぎりには、これらの一般化は妥当なように見える。

しかし、「チャ〈砺波〉」、「イネ〈山口〉」、「タイ〈博多〉」は同じ意味を表すわけではない。例えば、「チャ〈砺波〉」は平叙文専用の終助詞であるが、「イネ〈山口〉」は命令文でも使える。

(65) 早く 食べーイネ〈山口〉／*食べチャ〈砺波〉。(食べろよ)。

また、平叙文においても、「イネ〈山口〉」が「チャ〈砺波〉」に近い意味を表すとみられる場合とそうでない場合がある。

(66) A: あいつにあの仕事ができるかなあ。

B: あいつなら絶対 デキルイネ〈山口〉／デキッチャ〈砺波〉。(できるよ／できるさ) [断言・保証]

(67) A: 何回いわせるの。さっさとやりなさいよ。

B: うるさいな。いわれなくても ヤルイネ〈山口〉／ヤッチャ〈砺波〉。(やるよ)。 [非難・反発]

(68) あのツアー、おまえもちろん 行くイネ〈山口〉／*行くチャ〈砺波〉。(行くよね)。 [確認要求]

「タイ〈博多〉」についても、「チャ〈砺波〉」に近い意味を表すとみられる場合とそうでない場合がある。

(69) (こう考えるしかないと相手をなだめる)

虫のいどころが 悪カッタタイ〈博多〉／悪カッタガヤチャ〈砺波〉。(虫のいどころが悪かったんだよ。) 我慢しな。

(70) (「とりあえず味がよいことは確かだ」として)

マー、味ハ悪ウナカタイ〈博多〉／ワルナイチャ〈砺波〉。(まあ、味は悪くないよ。)

(71) (忘れていたことを思い出して)

あ、ソータイ〈博多〉／*ソーヤチャ〈砺波〉。(あ、そうだ)

お土産を 持ッテキトッタタイ〈博多〉／*持ッテキトッタガヤチャ〈砺波〉。

(お土産をもってきてたんだ。)

(72) (自分の推論に相手が賛同することを期待して)

へえ、そんなに忙しかったの。あ、ということは、タベ 寝トランタイ〈博多〉／*寝トランガヤチャ〈砺波〉。(寝てないんだ。)

このことは、「話し手にとっての既定事項の提示」というだけでは、「チャ〈砺波〉」、「イネ〈山口〉」、「タイ〈博多〉」の意味は十分に記述できないことを示している。これらの終助詞の意味を過不足なく説明するためには、これらの終助詞の使われ方を詳細に比較対照する必要がある。

しかし、方言間の比較対照による詳細な意味分析の前段階として、暫定的に「話し手にとっての既定事項の提示」という大まかな意味のタイプをたてることは意義のあることである。これはちょうど、「確認要求表現」、「引用表現に由来する終助詞」(船木2000参照)のような大まかな枠をたてた上で、関連する複数の表現の使い分けを分析するのと同じことである。以下、標準語の分析が応用できないところで、そのような大まかな意味のタイプとしてたてられそうなものをいくつかあげる。(表現の比較対照が必要なことを示すため、置き換えが可能な例とそうでない例をあげておく。)

1) 「話し手にとっての既定事項の提示」(前述のとおり)

2) 「その場での認識の成立」

砺波方言の「ワ」(井上1995b)、博多方言の「バイ」(坪内1995)がこれに属するとみられる。

- ・ 砺波方言の「ワ」は、その場で想起された個人的認識を表す。
- ・ 博多方言の「バイ」は、当該の情報が現場の事物、その場の推論、既成知識の検索などによってその場で得られた情報であることを表す。(坪内1995の記述を筆者なりに述べなおしたもの)

(73) A: あの患者さん、瞳孔が小さくなる症状が出たんだって。

B: ああ、じゃあ、それは サリン中毒バイ〈博多〉/サリン中毒ヤワ〈砺波〉。
(サリン中毒だよ)

(74) 何を言ってるの。あんたが 言イ出シタトバイ〈博多〉/*言イ出シタガヤワ〈砺波〉。そもそも。(あんたが言い出したんだよ)

3) 「その場での認識の更新」

砺波方言の「ジャ」(井上1999)、山形市方言の「ハ」(渋谷1999a)などがあげられそうである。

- ・ 砺波方言の「ジャ」は、それまで～pと考えていた話し手がpという線で認識を更新する必要性を感じていることを表す。
- ・ 山形市方言の「ハ」は、その場で新たに認識したり得たりした動的事態に関する情報が、話し手自身のもっている(もっていた)期待・予測・情報などと一致しない情報であることをマークする。

(75) (予想外の事実にあて)

ありゃ、いつの間にか桜 散ッタハ〈山形〉/散ッタジャ〈砺波〉。(散ったよ)

(76) (命令することに抵抗を感じながら)

そろそろ行ゲハ〈山形〉/*行ケジャ〈砺波〉。

4) 「既成知識と現実の間のずれに対するとまどい」

砺波方言の「ゼ」(井上1995a)がこれに属する。

・ 「ゼ」は「既成知識と現実との間のギャップにとまどいを感じている」ことを表す。金沢方言の「ジー」(北国新聞社編集局編1995)もこれに属すると見られる。

(77) (ふだんいいネクタイをしめない相手が、どういうわけかいいネクタイをしめている)

あれ、あなた、いいネクタイ シトルゼ↑〈砺波〉/シトルジー〈金沢〉。(いいネクタイしてるじゃない。)

終助詞の意味記述においては、まずはその終助詞が表す大まかな意味のタイプを把握することが肝要である。上記以外の意味のタイプもその過程で見出されることになる。そ

れはまた、他方言の類似の形式との比較対照を通じて終助詞の意味を詳細に分析する前段階の作業としてたいへん重要である。

4.3. 記述のポイント(その3) 語用論的効果

方言終助詞の記述研究においては、終助詞の使用によって生ずるニュアンス(語用論的効果)を終助詞の意味のタイプと関連づけて記述することも重要である。つまり、発話が有する種々のニュアンスを整理した形でとらえるわけである。

例えば、「話し手にとっての既定事項の提示」を表すタイプの終助詞は、しばしば相手に対して何かを保証する発話で用いられる(例66)。「このことは既に真であることが決まっている」という形で述べるのが「余計なことを考える必要はない」という気持ちの暗示につながるのである。また、(67)では、「このことについては既に決着済みだ」ということを示すことで、「これ以上言わないでほしい」という気持ちが暗示されている。

坪内(1995)によれば、博多方言の「タイ」は「相手を突き放して、見放したような言い方」になることがある。これも「こんな分かりきっていることにあなたは気づいていない」という気持ちが暗示されるからである。

(78) ソゲナコトシタラ先生ニオコラレルタイ。知ーラン。(そんなことしたって先生に叱られるから。知ーらない。)(坪内1995)

「その場での認識の更新」を表すタイプの終助詞は、言いにくいことを述べる際によく用いられる。「本意ではないが認めざるをえない」という形で述べるのがそのような語用論的用途と結びつくわけである。

(79) (聞き手の「社会の窓」が開いているのに気づいて、少し言いにくそうに)
アンタ、チャック、アイトルジャ(あなた、チャックがあいているよ)
(井上1999)

次の例でも、「話し手の思いと反することがらである」という形で述べることで、「これはあくまで過失であって、意図的な行為ではない」という気持ちが暗示されている。

(80) A: あのお菓子、もうない?
B: ごめん、全部クタクハ。(食べてしまったよ)(ケは回想)(渋谷1999a)

終助詞の意味のタイプとその語用論的効果との間にはかなり普遍的な相関関係があり、それは非母語話者にもある程度理解可能なものである。

(81) “要嗎?”(いる?)
“不要。／不要了。”(いらぬ。)

中国語では、断りの際に「新しい状況の出現」を表す語気詞(終助詞)“了”がしばしば用いられる。(81)でも、“不要了”の方が“不要”よりも柔らかい返答になる。これも、「新しい状況の出現」を表す“了”を用いることによって、「どうするのがよいか検討した上でその場で結論を出した」ということが暗示されるからである(杉村2000)。

5. 発展

3. で述べたように、方言モダリティ研究においては、「標準語などを含む、より一般的な枠組みの中にとらえるべき部分」と「その方言個別の問題としてとらえるべき部分」の見極めがまだ十分になされているとはいえない。また、方言のモダリティ表現の文法的・意

味的性質を記述するための道具立てもまだ貧弱であるといわざるをえない。

現段階ではまず、「標準語などを含む、より一般的な枠組みの中でとらえるべき部分」と「その方言個別の問題としてとらえるべき部分」を見極めることが重要である。また、モダリティ表現の意味記述のための道具立てをより豊かなものにすべく、各地方言の終助詞の精細な分析を積み重ねることが必要である。

今後文献にあげた論文等を参考にしながら、より多くの研究者がモダリティ表現の分析をおこない、議論が広げられることが期待される。

6. 文献

- 井上 優(1995a)「富山県砺波方言の終助詞「ゼ」の意味分析」『言語学論集』4, 東北大学文学部言語学研究室
- 井上 優(1995b)「方言終助詞の意味分析－富山県砺波方言の「ヤ／マ」「チャ／ワ」－」『研究報告集』16, 国立国語研究所
- 井上 優(1998a)「方言の終助詞の意味－富山県礪波方言を例に－」『月刊言語』27巻7号, 大修館書店,
- 井上 優(1998b)「富山県砺波方言の終助詞「ジャ」の意味記述」, 国立国語研究所編『日本語科学』4, 国書刊行会
- 井上 優(2001)「方言終助詞の記述研究のために」『日本語学』21巻2号, 明治書院
- 小林 隆(1999)「種子島方言の終助詞「ケル」」『ことばの核と周縁－日本語と英語の間－』くろしお出版
- 沢木 幹栄(1984)「津軽方言における単純疑問と疑問詞疑問」『国立国語研究所報告79 研究報告集』5
- 渋谷 勝己(1999b)「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- 渋谷 勝己(1999b)「文末詞「ケ」－三つの体系における対照研究－」『近代語研究』10, 武蔵野書院
- 渋谷 勝己(2000)「山形市方言における文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2
- 渋谷 勝己(2001)「山形市方言における確認要求方言とその周辺」『阪大社会言語学研究ノート』3
- 杉村 博文(2000)「“了”の意味と用法」『中国語』2000年3月号, 内山書店
- 田野村 忠温(1990)『現代日本語の研究 I－「のだ」の意味と用法－』和泉書院
- 竹田 晃子(2001)「岩手県盛岡市方言における文末形式ケの用法」『国語学会2001年度秋季大会要旨集』
- 坪内 佐智世(1995)「福岡市博多方言の不変化詞タイ・バイの意味記述」『九大言語学研究室報告』16
- 長澤 亜希子(1999)「秋田方言の終助詞「ケ」について」, 日高水穂編「秋田大学ことばの調査」1
- 仁田 義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田 義雄(2000)「認識的モダリティとその周辺」『日本語の文法3:モダリティ』岩波書店

- 藤原 与一(1982, 1985, 1986)『方言文末詞(文末助詞)の研究(上・中・下)』春陽堂書店
- 船木 礼子(1999)「山口方言の文末詞「イネ」について」『阪大社会言語学研究ノート』1
- 船木 礼子(2000)「引用表現形式に由来する文末詞の対照—山形市方言ズ, 山口方言チャ, 東京方言ッテ・ッテバについて—」『阪大社会言語学研究ノート』2
- 北國新聞社編集局編(1995)『頑張りまっし金沢ことば』北國新聞社(金沢)
- 益岡 隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 宮島達夫・仁田義雄編(1995)『日本語類義表現の文法(上):単文編』くろしお出版
- 森山 卓郎(2000)「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3:モダリティ』岩波書店
- 森山卓郎・安達太郎(1996)『日本語文法セルフマスターシリーズ9:文の述べ方』くろしお出版